

原著論文

石川県立看護大学附属図書館所蔵フローレンス・ナイチンゲール書簡 (J・A・ローバック宛) の転写・内容解釈・史的意義の考察

玉舎瑠衣¹, 工藤義信^{2,8}

要 旨

ナイチンゲール研究は、16巻にわたる Collected Works of Florence Nightingale (『ナイチンゲール著作集成』) の刊行により大きく発展した。本研究は、『ナイチンゲール著作集成』に収録されていない石川県立看護大学附属図書館所蔵の2通のナイチンゲール書簡のうち1通 (J・A・ローバック宛) を分析対象とし、書簡の転写・内容解釈・史的意義の考察を行った。その結果、本書簡とともにローバックに送られたのは、1857年に初めのバージョンを印刷後、資料の追加と加筆を経て、1858年に完成した「機密報告書」だと考えられた。J・A・ローバックは、1858年10月から1859年初頭にかけて「機密報告書」が送付された主要な人物の中の1人であるとわかった。当該書簡以外でのナイチンゲールによるローバックへの言及と照らし合わせると、彼女がローバックをどう評価していたかについて本書簡は重要な示唆を持つと結論でき、2者の関係についてさらなる調査の余地が示唆された。

キーワード フローレンス・ナイチンゲール, 未刊行書簡, 「機密報告書」, J・A・ローバック, ローバック委員会

1. はじめに

英国陸軍の衛生改革, 看護教育の創設をはじめ、多様な領域で先導的役割を担った Florence Nightingale (1820-1910, 以下ナイチンゲール) は、その生涯にわたり数多くの著作を残した。出版物や内部報告書を含む印刷文献が150点ほどあるのに加え、書簡や個人的なメモを含む手稿文献が英国をはじめ世界中の図書館・文書館に保存されており、中でも書簡の総数は1万通以上にも及ぶ^{1,2)}。広範な活躍ゆえの著作の膨大さと、それらが各地に散在している状況が、ナイチンゲールの営みを包括的に把握することに困難をもたらしていた。2001年から2012年にかけて刊行された16巻にわたる Collected Works of Florence Nightingale (『ナイチンゲール著作集成』, 以下『集成』)³⁾ は、編者 McDonald が把握しえたナイチンゲールのすべての著作の調査に基づき、印刷文献はもちろん、手稿文献の多くをも含めてテーマ別に編纂した著作集であり、『集成』の完成はナイチンゲール研究を大きく前進させた。しかし、石川県立看護大学が2002年から所有している2通のナイチンゲールによる書簡は『集成』には収

録されておらず、研究者の間でもあまり認知されていない (ただし、3.1の書簡の来歴に関する調査結果を参照)。本研究は2通のうち1通、すなわち英国の庶民院議員 John Arthur Roebuck (1802-1879, 以下ローバック) に送られた1858年11月23日付の書簡を分析対象とし、本書簡が、主に『集成』によって得られるナイチンゲールと政治家ローバックとの関係についての理解に、どのような新たな知見を提供しうるかを明らかにすることを目的とする。

本史料を読み解く前提として、19世紀英国の上流階級の女性をめぐる社会状況と、その状況下でのナイチンゲールの仕事のスタイルについて簡潔に付言しておきたい。ナイチンゲールは地主階級の出身であったが、当時の英国社会において上流階級の女性が職業に就くことはなく (ナイチンゲールが看護師として働くことをめぐり家族と対立したことはよく知られている)、ましてや政治の要職に就くことなどありえなかった (女性参政権が1860年代半ばから主張されるようになったという状況である)。クリミア戦争下での看護活動を終えて帰国したナイチンゲールは、現地の病院で痛感した問題を改善すべく、陸軍の衛生改革の推進に向け行動を開始したが、家系が持つ

¹岐阜県総合医療センター, 石川県立看護大学卒業

²石川県立看護大学 ⁸責任著者

た人脈と、クリミア戦争で得られた英国国内の名声を活用して、報告書を有識者や政府要人に送付し、書簡を通じた説得を通して物事を動かしていくことが、彼女にとって可能な道筋だった。そうした不断の取り組みが垣間見える史料として、本書簡を読み解いていく。

2. 研究方法

2.1 書簡の転写・翻訳、史料としての基本的事項に関する情報収集と記述

当該書簡が未刊行のものであることを踏まえ、本研究が実践した書簡の分析の是非を問うことと、『集成』のナイチンゲールのコーパス（テキストの集合体）に新たなテキストを追加することの双方の目的のために、書簡内容を転写し、日本語訳を付した。転写の妥当性の参考のため、当該書簡の全4ページの画像を掲載する（図1, 2）。史料の基本的情報として、書簡の形状と物理的状态についても記述し、史料の来歴に関わる情報を収集した。

2.2 書簡内容の解釈、史料的意義の考察

書簡の宛先と基本的意図を読み解き、個別の表現の含意について検討した。次いで、当該書簡とともに送られた「報告書」(“Report”)が何を指すか、宛先人ローバックが政治家としてクリミア戦争時どのような活動を展開していたか、ナイチンゲールがローバック及びローバック委員会(3.を参照)をどう評価していたかといった、書簡の意味内容に深く関わる事項に関して、19世紀当時に記された文書である一次資料(ここでは、『集成』に収録された、ナイチンゲールが取りまとめた報告書の内容や、同時期にナイチンゲールから他の人物へ報告書を送付する際に添えられた書簡、ローバック及びローバック委員会に言及している他のナイチンゲールの書簡に加え、ローバック委員会の調査報告書が該当する。史実の根拠となると同時に分析対象であり、文書の意図を踏まえた吟味を必要とする)の各内容と照らし合わせながら検討するとともに、研究文献である二次資料(ここでは、『集成』编者による収録史料への解説、ナイチンゲールの評伝書、19世紀イギリスの衛生問題と政策に関する研究論文、ローバックの政治活動に関する研究論文を含む。論述内容の活用にあたり、根拠としている一次資料の扱いについて検討を必要とする)を活用しながら、クリミア戦争から帰国後、英国陸軍の衛生改革に向

けたナイチンゲールの活動の中に当該書簡を位置づけた。最後に、『集成』には含まれていない当該書簡の内容が、政治家ローバックに対するナイチンゲールの見方について新たにどのような根拠を提供しているかを考察し、今後のさらなる研究の可能性を示した。

英語文献からの引用は、邦訳が刊行されている場合は邦訳を引用した。邦訳の刊行がない場合は、著者による日本語訳と引用原文を併記した。

3. 結果

3.1 書簡の形状・状態、来歴に関する情報

分析対象書簡は黒く縁どられた灰色の紙にペンで書かれている。1枚の紙を2つ折りにし、裏表を使用した4ページで構成されている。使用された紙は横228mm×縦181.5mmの大きさであり、1ページは横114mm×縦181.5mmの大きさである。2つ折りにした状態からさらに3つ折りにした跡があり、折り目にはわずかな割れがある。4ページ目の欄外上部には鉛筆とみられる筆跡で“autograph”(「自筆文書」)という書き込みがある。

本書簡は2002年に、丸善株式会社の協力を得て、石川県立看護大学が他のナイチンゲール関係史料とともに購入⁴⁾した。以前の所有者や正確な入手経路は不明だが、競売業者Sotheby'sのウェブサイト⁵⁾に、形状や日付・宛先人等の情報が本書簡と一致する史料がかつて競売にかかっていた記録⁵⁾が残っており、2001年の記録と見られる。英国では重要な歴史的資料を海外へ輸出する際の条件として、国内閲覧用に大英図書館(The British Library)へ史料の複写を預けることとなっているが、本書簡の複写とみられるものが大英図書館のオンライン・カタログに記載⁶⁾されている(書架記号:RP 7945/1)。同カタログによれば、当該複写の作成日は2001年12月6日であり、2002年に石川県立看護大学が書簡の現物を入手した事実と矛盾しない(ただし、英国国内閲覧用に保管されている当該複写は大英図書館内の閲覧のみ可能であり、本学図書館が所蔵する書簡の画像と実際に一致するかは未だ確認できていない)。McDonaldは『集成』の出版に加え、プロジェクト専用のウェブサイト⁷⁾で、『集成』に収録されなかった書簡を含む著作文献の転写とそれらの創作年月日順のリストを公表⁷⁾している。1858年11月23日付のローバック宛書簡はリストにはあるものの、書簡の転写はない。本書簡の存在は、大英図書館保管の複写およびSotheby's

の記録を通じて認知されてはいたと考えられるものの、現物史料の調査に基づく書簡の全内容の出版は本研究が初めてとなる。

3.2 書簡の転写

転写中の校訂はすべて著者による。一部、校訂記号を付けずに記号を語へ展開し、句読点を施した。

30 Old Burlington St. [Street]

W [Westminster]

23/11/58

Sir,

In venturing to send you a copy of my Report to the War Office, I am encouraged to do so, not by any hope that you will remember me, but by the great public services which you rendered at the time of the Crimean disaster of which it treats.

That is an old story now—But the great Sanitary interests of the Army to which it refers are never old. Nor are the good sense, the heroic simplicity and the indomitable patience of our men, which are there recorded.

I do not conceive that you will have leisure or inclination to read this Report yourself—But I am obliged to request that you will not let any one else read it—as it is in no sense a public document. It has not been laid on the table of the House—and therefore it must not lie on any one's table.

Believe me to be

Sir,

Your obedt [obedient] and obliged sevt. [servant]

Florence Nightingale

J. A. Roebuck Esq. M.P.

3.3 書簡の試訳

オールド・バーリントン通り 30 番

ウェストミンスター

1858 年 11 月 23 日

閣下、陸軍省への私の報告書一冊をあなたにあえてお送りするのは、閣下が私のことを覚えているだろうという期待からではなく、この報告書が取り扱うクリミアの惨事の際に閣下が提供された偉大なる公務に励まされてのことです。

それは今となっては古い話ですが、この報告書

が言及している陸軍の衛生上の大きな関心事は決して古いものではありません。また、そこに記録されている我々が兵士たちの良識、英雄的な実直さ、不屈の忍耐力も古いものではありません。

この報告書をご自身でお読みになるお時間やお気持ちはないと思いますが、他の誰にも読ませないようにお願いしなければなりません。というのもそれはいかなる意味でも公の文書ではありませんから。この報告書は議会のテーブルに置かれていないので、誰のテーブルにも置かれてはいけません。

閣下、私があなたの従順で義理堅い仕え人であると信じてください。

フローレンス・ナイチンゲール

英国議会議員 J・A・ローバック殿。

4. 考察

分析対象書簡は、ナイチンゲールが 1858 年 11 月 23 日に英国議会庶民院議員 J・A・ローバックに送った書簡である。その内容から、ローバックに送付した「報告書」に添えられたものであることがわかる。書簡の後半では、当該報告書を誰にも見せてはいけない旨を繰り返し伝えており、当該報告書が内密のものとして意図されていたことがわかる。(なお、冒頭の“30 Old Burlington St.”は宛先ではなく、書簡の送り主の住所、すなわちナイチンゲールがクリミア戦争から帰国後滞在していたバーリントンホテルの住所である⁸⁾。)

以下ではまず、本書簡とともに送られた「報告書」とは何を指すかを、その作成と送付の経緯とともに明らかにする。続いて、宛先人である政治家ローバックと、彼が 1855 年に主導したローバック委員会について概観する。最後に、ローバック及びローバック委員会に対するナイチンゲールの評価と照らし合わせながら、本書簡に表現されたローバックへの評価の言葉を吟味するとともに、ローバックへ「報告書」が送られた事実の重要性について指摘する。

4.1 ナイチンゲールによる「機密報告書」作成と送付

本書簡が添えられて送付された内密の「報告書」とは、ナイチンゲール自身が作成した、マクドナルド⁹⁾の言うところの「機密報告書」—『英国陸軍の保健覚え書』(*Notes on the Health of the British Army*, 次段落参照)—のことであると結論づけられる。クリミア戦争勃発から 1 年以上が

30 Old Kurokiyama St
 W 22/11/58

Sir I am venturing to
 send you a copy of
 my Report of the
 San Office, I am
 encouraged to do so,
 too by my hope that
 you will remember the
 part by the great
 public services which
 you rendered at the

autograph
 It has not been laid
 on the table of the
 House - and therefore
 it must not be on
 any one's table -
 Believe me Sir
 Sir
 Yours obedt Servant
 Francis G. Pyphens
 J. A. Keibuck Esq.

図1 石川県立看護大学附属図書館所蔵フロレンス・ナイチンゲール書簡 (J・A・ローバック宛) 1, 4 頁 (著者撮影, 所蔵図書館の許諾のもと掲載)

time of the German
division of which
it treats -
That is an old
story now - But the
great sanitary
interests of the
Army of which it
refers are never
old - You are the
good sense, the
heroic simplicity
& the indomitable
patience of our men,
which are there
recorded -
I do not conceive
that you will have
interests or inclinations
to read this Report
yourself - But I am
obliged to request
that you will not
let any one else
read it - as it is
in no sense a
public document.

図2 石川県立看護大学附属図書館所蔵フロレンス・ナイチンゲール書簡 (J・A・ローバック宛) 2-3頁 (著者撮影, 所蔵図書館の許諾のもと掲載)

経過した1854年11月、看護師団の統括者としてスクタリの英国陸軍病院に派遣されたナイチンゲールは、当病院の劣悪な衛生状態のために多くの兵士の命が犠牲になった状況を目の当たりにした。帰国後、同じ失敗を二度と繰り返さないために、当陸軍病院における惨事の原因を究明することを目的とした王立委員会の設置を求め、これが認められ設置される過程と並行して実際の調査を実施した。マクドナルドによると、ナイチンゲールは委員会の調査結果として議会で報告するための「公式報告書」(1858年2月公刊)とは別に、当時の陸軍大臣パンミュア卿から「要約」(“Précis”, 以下「機密報告書」)の作成について個人的な依頼を受けており、専門家とチームを組んで、2種類の報告書のための作業を同時に進めていた¹⁰⁾。2種類の報告書の内容は互いに重複するものの、「公式報告書」はクリミア戦争時の衛生管理及び連絡体制上の問題点を簡潔に指摘し、それらの改善に向けて実施すべきことを説く一方、瑕疵のあった個人への言及はない。これに対し、「機密報告書」は戦時の任務に就いていた者の中で、誰がいかなる義務を怠ったのかを詳細に指摘している⁹⁾。問題の原因を明らかにすることが目的ではあるものの、個人の過失を追及する性質も強いことから、内密のものとして、今後の改革のために有力な人物にのみ個人的に送付したのだと考えられる。

「機密報告書」はいくつかの追加・加筆段階を経て発展した経緯が知られている。McDonaldによると、1857年に印刷された「機密報告書」の原題は*Notes on the Care and Treatment of Sick and Wounded During the Late War in the East, and On the Sanitary Requirements of the Army Generally*であった¹¹⁾。ナイチンゲールは1858年2月4日、戦時大臣を退いてからもナイチンゲールに協力的であった長年の友人シドニー・ハーバートに宛てて、この文書の序文に掲載する手紙を書いてほしいという依頼の書簡を添えて上記タイトルの報告書を送付した。しかしこのタイトルで印刷をしているタイミングでハーバートから受け取ったのが、クリミア戦争時に取り交わされたロンドンの陸軍医務局総督、スクタリの医務部長、各部隊付きの医官との間の膨大な通信文であった。ナイチンゲールはこれを軍の管理運営上の欠陥を知るための新たな重要資料と捉え、自身で用意した要約とともに付録として追加し、序文を改訂・追加した¹¹⁾。以上の過程を経

て1858年に再印刷されたのが、計800ページを超える*Notes on Matters Affecting the Health, Efficiency and Hospital Administration of the British Army Founded Chiefly on the Experience of the Late War*であり(*Notes on the Health of the British Army*の略称で知られている)、ローバックを含めた多数の有力者に送られた完成版の「機密報告書」である。

『集成』第14巻には、1858年10月から1859年1月にかけてナイチンゲールが個人宛に送付した「機密報告書」に添えられた書簡が編纂されている。McDonaldによれば、本報告書が送られた人物だけでなく、送られた順番が、当該事業に関してナイチンゲールがその人物に恩恵を受けた度合いを表しているという¹²⁾。初めにクリミア戦争以来の友人で報告書作成をともに進めた医師ジョン・マクニール卿と、彼らに協力的であったド・グレイ卿に送付され、次いで報告書の依頼人パンミュア卿、次にエドウィン・チャドウィック(1842年に著した労働者階級の衛生状態に関する報告書で知られる)へ送られた。続いて報告書作成の提案をした女王へは侍医ジェームス・クラーク卿を経由して送られ、次にシャフツベリー卿(ナイチンゲールの友人で首相を務めたパーマストン卿の義理の息子。公衆衛生法に基づき設置された衛生委員会を指導)に送られている。1858年10月2日から10月16日にかけて前述の人物らへ書簡が送付され、その後1859年初頭までの間に、他の軍人や聖職者、医師などに送付された¹²⁾。そうした中で、1858年11月23日にローバックへ本書簡が送られたのである。

ローバック宛の書簡は、この時期の他の人物宛の書簡に使われているものとよく似た表現を使用していることがわかる。例えば、ローバック宛の書簡と同じ1858年11月23日にとある人物へ送られた書簡には「1つお願いしなければならないことがあります。この報告書をあなたのテーブルの上に置かないでください(庶民院議会のテーブルには置かれていません)。また、ご自身でお読みにはならないとしても、他の人にこれを読ませないでください。これは本当に『機密』であり、決して公的な文書ではありません。」(“One thing I must ask you—not to let this report be on your table [it has not been laid on the table of the House of C.] nor to let anyone else read it, if you do not read it yourself. It is really ‘confidential’ and in no sense a public

document.”角括弧は丸括弧として原文に含まれる)¹³⁾と記され、1858年11月26日に別の人物に送られた書簡には、「もし私の報告書を読む時間がなければ、火の中に入れてください。」(“If you have not room for my report, please put it in the fire.”)¹⁴⁾と他言無用であることを示唆する依頼が含まれている。さらに、クリミア戦争における陸軍の惨事は過去のことであるものの、「機密報告書」の内容は決して古くなく、現在まさに重要性を持った内容であることを宛先人にアピールするにあたり、やはり共通のフレーズを繰り返し使用していることが窺える。例えば1858年11月22日にある人物に送られた書簡には“It is an old story now”¹⁵⁾とあるが、これはローバック宛書簡第2段落冒頭の“That is an old story now”と類似している(ただし、これに続くフレーズが互いに異なることも注目に値する)。このように、1858年10月から1959年初頭にかけて、ナイチンゲールは類似の表現を繰り返し使用し、同時に個々の宛先人に応じてメッセージを変えながら、関係者たちへ「機密報告書」を送っていた事実が浮かび上がり、その中でローバックにも送付していたことがわかるのである。

4.2 政治家ローバックとローバック委員会の設立及びその活動

本書簡の存在によって明らかとなった、1858年の完成版「機密報告書」が送付された有力者の中にローバックが含まれていたという事実は、後に述べるように、ナイチンゲールとローバックとの関係性に重要な示唆を含んでいる。その具体的な指摘に先立ち、19世紀英国の政治家ローバック、ローバック委員会設立の経緯と同委員会の活動の結末について概観する。

ローバックは急進主義的信条をもつ政治家であった¹⁶⁾。彼は1833年にバース選出の庶民院議員として初めて議会入りを果たし、1849年以後は(分析対象書簡が書かれた時期を含む)シェフィールド選出の庶民院議員として活動した。その長きにわたる政治人生において一貫して、トーリ、ホイッグの各政党から距離を保ち、権威ある人物に対しても臆せず率直にものを言う数少ない議員の1人として名を馳せていた¹⁷⁾。

クリミア戦争が勃発した1853年から1854年にかけて、保守党(トーリ)の第4代アバディーン卿を首相としたアバディーン政権が英国陸軍を指揮していた。地中海への進出をはかるロシアに

対する英仏の警戒を背景として、1853年7月のロシアによるトルコ領への進駐を契機に始まったクリミア戦争は、最終的にはトルコ・英国・フランスを中心とする連合軍が勝利したものの、英国にとっては自国軍の運営体制の不備が明るみに出た戦争であった¹⁸⁾。1854年秋、ロシアの軍港セバストポリを短期に攻略する時機を逃した連合軍は、長期の包囲戦のための準備がないまま、軍港周辺の高地で厳しい冬を過ごさなければならなかった。英国兵たちは、冬用の制服が届かないために夏用の制服で過ごすことを余儀なくされ、燃料である木炭も組織的に供給される体制が整えられておらず、凍傷に苦しむ兵士が続出した。食料は配給されるのみで、部隊ごとに調理される仕組みを持たなかった英国兵の食事は貧しく、コレラや他の病気の蔓延も相まって、多数の兵士が深刻な衰弱状態に陥った。傷病兵は、船で戦地から遠く離れたスクタリの陸軍病院へ移動しなければならなかったが、英国陸軍病院の人材不足、物資不足もまた深刻で、衛生的に治療を受け、療養生活を送るには程遠い環境であった¹⁹⁾。

ここで注目すべきは、マクドナルドが指摘するように、クリミア戦争が、戦地に報道記者が入り、電信という新技術を駆使して現場から速報記事を本国に伝えた史上初めての戦争でもあったことである²⁰⁾。とくに、前世紀末に創刊した英国の日刊新聞『タイムズ』紙の特派員ウィリアム・ハワード・ラッセルが、編集長ジョン・ディレーンのもとで活躍し、その連日の速報記事は英国国民の間にセンセーションをもたらした。ナイチンゲールは『タイムズ』紙の報道記事によって戦地の傷病兵たちの置かれた状況を知り得て行動の必要性を確信し、戦時大臣ハーバートから正式な派遣の要請を受けて現地へ向かった²¹⁾わけだが、ローバックの評伝の言葉を借りれば、ローバックもまた新聞報道を通して知り得た英国兵士たちの悲惨な状況に「深く心を動かされ」(“deeply moved”)、「そのような出来事が声高に調査を求めていると感じ」(“feeling that such events cried aloud for investigation”)²²⁾、戦争管理の実態を取り調べる委員会の設置を求める行動へと動き出したのである。

ローバックは1855年1月、クリミアにおける英国派遣軍の状態と、軍の物資補給を管理する義務にあった政府各部署の行動を調査するための委員会の設置を要求する動議を議会に提出した²³⁾。庶民院の3分の2の賛同票を得て可決された本動

議は、ファイジズの指摘の通り、「政府の戦争指導に対する事実上の不信任決議」となった²⁴⁾。ファイジズによると、「ローバックの意図は必ずしも内閣打倒ではなく、むしろ議会に対する内閣の説明責任を明確にしようとするにであった」²⁴⁾という。だが既に新聞報道と世論から大きな圧力がかかり、議会でも追及を受けたアバディーン内閣は、票決の翌日には総辞職した²⁴⁾。

以上のように、ローバックが主導したクリミア戦争時の内閣の行動への調査の動議は、世論の高まりが追い風となり²⁵⁾、結果的に当時の政権にとどめを刺すまでに至った。だがその後実際に設立された委員会が行った調査と、その結果に基づきローバックが7月に提出した政府非難の動議は、必ずしも効果的なものではなかった。ローバックによる1月の動議の可決を受けて設立された委員会は、「ローバック委員会」あるいは「セバストポリ委員会」と呼ばれた。McDonaldは次のように説明する。「ローバック委員会は、1855年3月に始まり2か月間、証人から証言を取った。61名の証人に聞き取りをしたが、ロンドンでしか調査を行わなかったことにより、通常ロンドンに駐在している役人や、戦地から帰国した医官及び他の士官、監視員に実質的に証人が限定されることとなった。」(“The committee took evidence for two months, beginning in March 1855. It heard sixty-one witnesses, but only in London, which effectively confined its evidence to officials normally stationed there and returned medical and other officers and observers.”)²⁶⁾ ローバック委員会により作成された報告書は、当時の陸軍の状態や物資の供給などに対する内閣の行動に関する多くの証人への質疑応答から構成された。1855年7月、ローバックは委員会によって作成された5つの報告書(*First to Fifth Reports from the Select Committee on the Army Before Sebastopol*)²⁷⁾に基づき、「本院は、クリミアにおける冬期作戦の間に受けたわが軍の苦しみを深く嘆き、また政府の行動がわが軍に降りかかった災難の最初にして最大の原因であるという委員会の決議と一致して、ここに、このような悲惨な結果を招いた内閣のすべての構成員に厳しい叱責を与えることとする」(“That this House, deeply lamenting the sufferings of our army during the winter campaign in the Crimea, and coinciding with the resolution of the committee that the conduct of the Administration was the

first and chief cause of the calamities which befell that army, do hereby visit with severe reprehension every member of that Cabinet which led to such disastrous results.”)²⁸⁾ という決議案を提出したが、1月の動議の時とは異なり、前内閣の責任の追及を続けるローバックの姿勢に共感する議員は少なかった。票決が取られることのないまま、審議中の別の議題へ立ち戻る形で、動議はお蔵入りとなった²⁹⁾。

4.3 『集成』収録資料からみたローバック及びローバック委員会に対するナイチンゲールの評価に照らして、当該書簡が示唆すること

前節で概観したローバックの政治家としての性格と、クリミア戦争に関連するローバックの活動を踏まえたとき、ナイチンゲールがローバックへ賛辞を添えた本書簡とともに「機密報告書」を送付した事実は注目に値する。前提として、ナイチンゲールとローバックとの直接的なやり取りを示す史料は本書簡以外には知られていない(『集成』³⁾にはローバック宛の書簡はひとつも収録されていない。Collected Works of Florence Nightingaleのウェブサイト公開のファイル⁷⁾にも、本書簡以外に該当する記録はない。また、ローバック委員会の報告書²⁷⁾に記録されている証人からの回答にナイチンゲールへの言及が多くみられるが、ナイチンゲールは同委員会の調査に直接協力はしていない。その上で、『集成』にはナイチンゲールがローバックないしローバック委員会に言及している著作が6点収録されており、このうちローバックもしくはローバック委員会へのナイチンゲールの評価の一角を表すものとして分析対象の書簡と照らし合わせる価値のある言及を含むものは3点(2点は他の人物への書簡、残る1点は「機密報告書」作成のためのメモ)である。

分析対象の書簡では、ナイチンゲールのことを覚えてくれているかもしれないという期待からではなく、クリミアの大惨事においてローバックが提供した「偉大なる公務」(“the great public services”)に励まされてこの報告書を送っているとし、押しつけがましさを否定する修辞を用いつつ、同時に宛先人の功績を称える言葉を送っている。本書簡だけを見れば、ナイチンゲールは、ローバック委員会による調査を含む、内閣の責任を追及するためのローバックの行動全般のことを好意的に見ていたと解釈できそうである。だが、本書簡より前の時期に書かれた、1856年9月28日付

のシドニー・ハーバート宛の書簡においては次のように述べている。ナイチンゲールがスクタリの陸軍病院の劣悪な衛生状態・物資不足と闘いながら傷病兵の看護に勤しんでいた時期に、ジョン・マクニール卿とアレクサンダー・タロックを頭とした、現地の物資補給の状況を取り調べる調査団が派遣されたが、ナイチンゲールは、その調査委員会による報告書を擁護する文脈で、同委員会による誠実な仕事が「ローバック委員会の効果を中和した」(“neutralized the effect of Roebuck’s committee”)と述べているのである³⁰⁾。McDonaldが指摘する通り、ここにはローバック委員会の仕事あまり誠実なものではなかったという含みがある³¹⁾。さらに「機密報告書」作成用のメモでは、ローバック委員会がアンドリュースミス医師(クリミア戦争時の陸軍医務局軍医総監。ナイチンゲールはスクタリ病院の問題を放置した彼に責任の一旦があると考えていた)から一度返答を受け取ったにも関わらず、スミス医師についてそれ以上の調査を進めなかったと述べた上で、「ローバック委員会は私の知る限り、人々の朝食時の話題を提供すること以外は何もしなかった」(“Roebuck’s committee never did anything that I know of but furnish people with breakfast table conversation”)と厳しいコメントを残している³²⁾。ブリッグズによると、1855年3月に始められたローバック委員会の聞き取り調査は一般に公開され、多くの市民が入場を求めて集まり、証人が委員会で述べた証言は日々新聞で公表された³³⁾。このことから、ローバック委員会の活動は世間の注目を集めていたことが窺えるが、上述のコメントから推察すると、ナイチンゲールはその状況をむしろ冷ややかに捉え、目指すべき改革のための実質的な効果をもたらさない(ともするとむしろ害をもたらす)委員会と見ていたようである。

以上2つの言及を見る限り、ナイチンゲールはローバック委員会とその活動を低く評価していたと考えられるが、McDonaldの分析も示唆するように、ローバック個人に対する見方はまた別だと考えられる。例えば同じ「機密報告書」のためのメモの中で、ローバック個人のことは「鋭い」(“sharp”)人物と、肯定的な形容詞で評している³²⁾。また、1865年7月に英国国教会司祭で友人のベンジャミン・ジョウエットへ宛てた書簡では、同月に終えたばかりの英国議会総選挙について綴りながら、ローバックの闘争力に好意的に触

れている。「私にも闘争力があればと思います。人を生涯にわたって導いてくれるのは、そのような力なのです。誰かがローバックのことをこう言っていました—彼はシェフィールドの野獣と戦ったことで、《エペソ選出議会議員》になる資格を得たのだ、と。私も《エペソ選出議会議員》になる資格を得られたらどんなに良いことでしょう。」(“How I wish I had the combative faculty. It is such a power to carry one through life. Someone said of Roebuck: he was qualified by his fight with the wild beasts of Sheffield to become member for Ephesus. How I wish I could qualify to be member for Ephesus.”)³⁴⁾ McDonaldの注釈の通り、本節は新約聖書『コリントの信徒への手紙一』15章32節³⁵⁾を踏まえてローバックの闘争力を表現した他の人の言葉を援用している。シェフィールドで彼と争う勢力をエペソの野獣になぞらえ、野獣を討って《エペソ選出議会議員》(member for Ephesus)となる資格を得るという隠喩を用いて、政敵との激しい闘いの末にシェフィールド選出議会議員(M.P. for Sheffield)の議席を勝ち取るローバックの力を好意的に描いていると言えよう。ただし、このジョウエット宛書簡ではローバックに敵対する勢力を野獣にたとえているのに対し、先述の「機密報告書」のためのメモでは、ローバックを必ずしも讃えてはいない文脈で、彼自身が取りうる振る舞いのことを熊のそれにたとえてもいることから(“Roebuck behaves to him like a bear”)³²⁾、ローバックの闘争的な性格を一貫して好意的に見ているわけではなく、多面的に捉えていることが窺える。McDonaldはシェフィールドがナイチンゲールのルーツのひとつであることにも着目し、「ナイチンゲールは、彼女の(父方)ショア家系の祖先が住んでいた都市でもあるタフな産業の中心地シェフィールド選出の英国議会議員であったローバック自身には、渋々ではあるが敬意を払っていたようである」(“it seems that she held at least a grudging respect for Roebuck himself, MP for Sheffield, the city of her Shore ancestors, and a tough industrial centre”)²⁶⁾と分析している。

分析対象書簡の真意は、上で取り上げたナイチンゲールの他の著作におけるローバック及びローバック委員会への言及を踏まえて吟味する必要がある。ローバックの「偉大なる公務」は、一見してローバック委員会の調査活動を指しているよう

だが、仮にそうだとすると、他の著作でローバック委員会を酷評していることと相反する賛辞を送っていることになる。もちろん、矛盾しているから解釈として不可能ということはない。例えば、「機密報告書」を読んでほしい宛先人ローバック本人には本心ではない賛辞を送り、本人以外の人物には本心を語るということは考えられる。読んでもらえる可能性への期待が少しでもあるから報告書を送付していることは明白なのに、これを読む時間やお気持ちはないであろうと述べて押しつけがましさを自ら打ち消すなど、ポライトネスを示す修辭に彩られた本書簡においては、宛先人の賞賛も同様に、本心からというよりは礼儀で述べていると捉えるのが自然とも考えられる。しかしマクドナルドは次のようにも述べている。「ナイチンゲールは優れた文章家であり、人間味溢れるユーモアや文学的に味わい深い引喩で彩りつつも、こと正確さと事実をありのままに語ることに於いて厳しい人だった」³⁶⁾。

もうひとつの可能性として、ナイチンゲールはローバック委員会設立後の調査活動は全く評価していなかったものの、委員会設立に至るまでの、クリミア戦争下の陸軍の惨状に関する内閣の説明責任を問うローバックの動議については評価している。「偉大なる公務」はそのことを指しているとも考えられる。戦地から伝えられた、飢えと寒さと疫病に苦しむ英国兵の状況を問題と捉え行動を起こした点で、ローバックに少なからぬ共感を抱いていたのかもしれない。

こうしたいくつかの解釈の可能性について結論付けることは難しいが、いずれにしてもローバック委員会を酷評していた証拠がある中で、本書簡は他の書簡やメモに見られるローバック個人に関する肯定的なコメントと呼応して、ナイチンゲールがローバック本人を評価していることを裏付けるものであるといえる。とりわけ、本書簡とともにローバックに「機密報告書」を送付した事実は、ローバックを内部の報告書を共有するに値する、陸軍の衛生改革の推進のためになる有力な人物の1人として見ていたことを示唆している。「機密報告書」作成を依頼したパンミュア卿をはじめ、報告書作成に協力していた人物に送付されることは当然の成り行きである一方、直接的な関与が知られていないローバックに当該報告書を送付された事実は、その意図とともに注目に値する。Dossey が概説しているように、ローバックの動議がアバディーン内閣を退陣へと追い込んだ際、

シドニー・ハーバートは戦時大臣を辞しており、さらにローバック委員会が審問調査を開始した際には、ハーバートはパーマストン政権下でやはり閣僚職を辞している³⁷⁾。その影響はナイチンゲールにとって大きくはなかったとする見解²³⁾もあり、実際、陸軍の改革に向けたハーバートとナイチンゲールの協力関係はその後も堅固に継続していった。それでもなお、以上のように1855年のローバックの活動が、ナイチンゲールの盟友ハーバートを内閣から退かせる結果へと導いた経緯とあわせて考えたとき、1858年のナイチンゲールによるローバックへの機密報告書送付の事実は、なおのこと興味深いものだといえる。しかしこの事実の重要性のより詳しい検討のためには、1858年10月以降に「機密報告書」が送付された人物の範囲（とくに、報告書作成に深く寄与のあった人物以外ではどのような人物に送られたのか）の精査と、それぞれに付された書簡同士のより詳細な比較検討を経て、「機密報告書」送付事業全体のねらい・方針とともに吟味する必要がある、それは今後の研究課題としたい。

5. 結論

本研究は石川県立看護大学附属図書館が所蔵するローバック宛のナイチンゲール書簡の内容を吟味し、関連する他の一次資料・二次資料と照らし合わせながら、英国陸軍の衛生改革を目的としたナイチンゲールの当時の中に本書簡を位置づけ、その性質の理解を深めることを試みた。その結果、本書簡とともにローバックに送られたのは、1857年以降資料の追加と改訂・加筆が重ねられていたクリミア戦争時の英国陸軍の衛生状態を伝えた「機密報告書」のうち、1858年に完成されたバージョンであると考えられる。またナイチンゲールは1858年10月から1859年初頭にかけて、当該バージョンの「機密報告書」を、作成にあたって恩恵を受けた人物や他の有力者へ送付しており、ローバックはその送付先の1人であることが分かった。クリミア戦争時の内閣の責任追及を目的に調査を実施したローバック委員会をナイチンゲールが全く評価していなかった証拠が存在する中で、本書簡の内容とそれが示す事実は、ナイチンゲールがローバック個人のことは有力視していたことを示唆しており、興味深い史料といえる。「機密報告書」送付先の範囲やその方針と合わせて、さらなる検討が期待される。また、本書簡以外に2者が送受した書簡や記録は見つからなかつ

たため、本書簡は2者の直接的な関わりを示す貴重な史料であると結論づけられる。ローバックが19世紀中の長きにわたって政治家として活躍した人物でありながら、本格的な人物研究が未だ不足しているという指摘³⁸⁾もあり、さらなる研究の余地が示唆されている。クリミア戦争下の陸軍の運営を問題視するという点では当時の2者の政治的姿勢に通ずるものがあることから、両者が何らかの協力関係にあった可能性についても調査検討の余地があり、本書簡以外の新たな書簡の存在及びさらなる研究の発展の可能性が考えられる。本書簡の存在を契機として、当時の2者の関係についてさらに調査が進められるべきだと考える。

謝辞

本研究に際し、書簡史料の閲覧調査、撮影および本稿への掲載を承諾し便宜をはかって頂きました石川県立看護大学附属図書館長並びに図書館員の皆様、丹保大八様をはじめ、史料入手の経緯に関する問い合わせに快く応じて下さいました丸善雄松堂株式会社の皆様、Collected Works of Florence Nightingaleのプロジェクト専用ウェブサイトにおける公開情報に関し貴重な情報を提供して頂きましたゲェルフ大学名誉教授リン・マクドナルド様、英文要旨の校正にご協力頂きましたキャサリン・メイソン様に、心より御礼申し上げます。

利益相反

なし

引用文献

- 1) リン・マクドナルド(金井一薫, 島田将夫, 小南吉彦訳): 実像のナイチンゲール. 現代社, 4,17, 2015.
- 2) 湯横ます, 小玉香津子, 薄井坦子, 他2名: 新訳・ナイチンゲール書簡集—看護婦と見習生への書簡. 現代社, iii, 1977.
- 3) McDonald L: Collected Works of Florence Nightingale. 16 vols. Wilfrid Laurier University Press, Waterloo, 2001-2012.
- 4) ナイチンゲール直筆書簡 県立看護大が購入. 北國新聞, 2002年4月5日.
- 5) Sotheby's: Nightingale, Florence. Autograph letter signed ("Florence Nightingale"). <http://www.sothebys.com/en/auctions/ecatalogue/2001/english-literature-history-childrens-and-illustrated-books-and-drawings-l01317/lot.38.html> (accessed 2022/9/17)
- 6) British Library, Explore Archives and Manuscripts: NIGHTINGALE, Florence. Autograph Letter Signed from Florence Nightingale to J A Roebuck, 30 Old Burlington St. [https://searcharchives.bl.uk/primo_library/libweb/action/display.do?tabs=detailsTab&ct=display&fn=search&doc=IAMS041-000944334&indx=3&recIds=IAMS041-000944334&recIdxs=2&elementId=2&renderMode=poppedOut&displayMode=full&frbrVersion=&frbg=&&dscnt=0&scp.scps=scope%3A%28BL%29&mode=Basic&vid=IAMS_VU2&srt=rank&tab=local&vl\(freeText0\)=RP%207945&dum=true&dstmp=1674540163518](https://searcharchives.bl.uk/primo_library/libweb/action/display.do?tabs=detailsTab&ct=display&fn=search&doc=IAMS041-000944334&indx=3&recIds=IAMS041-000944334&recIdxs=2&elementId=2&renderMode=poppedOut&displayMode=full&frbrVersion=&frbg=&&dscnt=0&scp.scps=scope%3A%28BL%29&mode=Basic&vid=IAMS_VU2&srt=rank&tab=local&vl(freeText0)=RP%207945&dum=true&dstmp=1674540163518) (accessed 2023/1/24)
- 7) University of Guelph: The Collected Works of Florence Nightingale, F. Archival Material. <https://cwf.n.uoguelph.ca/archival/> (accessed 2023/1/24)
- 8) London Picture Archive: Burlington Hotel in Cork Street. <https://www.londonpicturearchive.org.uk/view-item?i=132066&WINID=1635223311699> (accessed 2022/9/17)
- 9) 前掲書1), 176.
- 10) 前掲書1), 175.
- 11) McDonald L: Florence Nightingale: The Crimean War (Volume 14 of The Collected Works of Florence Nightingale). Wilfrid Laurier University Press, Waterloo, 574-575, 2010.
- 12) 前掲書11), 980-983.
- 13) 前掲書11), 987.
- 14) 前掲書11), 988.
- 15) 前掲書11), 986.
- 16) Beaver SA: Roebuck, John Arthur (1802-1879), politician. Oxford Dictionary of National Biography. Oxford University Press, Oxford, 2004. <https://doi.org/10.1093/ref:odnb/23945> (accessed 2022/9/15)
- 17) A・ブリッグズ(村岡健次, 河村貞枝訳): ヴィクトリア朝の人びと(新装版). ミネルヴァ書房, 86-87, 1995.
- 18) 松村尅, 富田虎男: 英米史辞典. 研究社, 176-177, 2000.
- 19) オーランドー・ファイジス(染谷徹訳): クリミア戦争(下). 白水社, 15-38, 2015.
- 20) 前掲書1), 165.

- 21) セシル・ウーダム=スミス(武山満智子, 小南吉彦 訳): フロレンス・ナイチンゲールの生涯(上巻). 現代社, 188-198, 1981.
- 22) Leader RE: Life and Letters of John Arthur Roebuck, P.C., Q.C., M.P. Edward Arnold, London, 258, 1897.
- 23) 前掲書21), 281.
- 24) 前掲書19), 60.
- 25) 前掲書17), 87-90.
- 26) 前掲書11), 23.
- 27) British Parliamentary Papers, IX, Pts. I.1-6, I.7-739, II.1-521, III.1-364, III.365-679, 1854-55.
- 28) 前掲書22), 260-261.
- 29) 前掲書17), 106-107.
- 30) 前掲書11), 452.
- 31) 前掲書11), 25.
- 32) 前掲書11), 473.
- 33) 前掲書17), 100.
- 34) McDonald L: Florence Nightingale on Society and Politics, Philosophy, Science, Education and Literature (Volume 5 of The Collected Works of Florence Nightingale). Wilfrid Laurier University Press, Waterloo, 336, 2003.
- 35) Carroll R, Prickett S: The Bible: Authorized King James Version with Apocrypha. Oxford University Press, Oxford, N.T. 220, 1997.
- 36) 前掲書1), 16.
- 37) Dossey BM: Florence Nightingale: Mystic, Visionary, Healer. F. A. Davis Company, Philadelphia, 143, 2010.
- 38) Cruikshank AF: J. A. Roebuck M.P.: A reappraisal of liberalism in Sheffield, 1849-1879. Northern History, 16, 196-214, 1980.

Florence Nightingale's Letter to John Arthur Roebuck Preserved in the Library of Ishikawa Prefectural Nursing University: Transcription, Interpretation of the Content, and Consideration of its Significance

Rui TAMAYA, Yoshinobu KUDO

Abstract

Scholarship on Florence Nightingale has recently seen remarkable progress thanks to the publication of the *Collected Works of Florence Nightingale* in sixteen volumes, edited by Lynn McDonald from 2001 to 2012. This study, however, focuses on one of the two letters by Nightingale that were not published in the *Collected Works*: that addressed to John Arthur Roebuck. Both of these two letters are preserved in the Library of Ishikawa Prefectural Nursing University. The study consists of a transcription of the letter, an interpretation of its contents, and consideration of its significance as a historical source. This study has found that what is referred to as a "Report" in the letter refers to the 1858 final version of Nightingale's "confidential report" known as *Notes on the Health of the British Army*, which had been revised with additional materials since its original print in 1857. The study has also found that Roebuck was one of the important figures to whom Nightingale sent copies of her report during the period between October 1858 and early 1859. By comparing what is written in the letter with references to Roebuck in her other writings, this study concludes that the letter in question, along with the fact that she sent her report to Roebuck with it, has significant implications about the way Nightingale saw Roebuck. The findings of this study suggest there is room for further examination of the relationship between Nightingale and Roebuck during their lifetime.

Keywords Florence Nightingale, unpublished letter, "confidential report," John Arthur Roebuck, the Roebuck Committee